

## 継続がもたらすもの



山崎 淳\*

発展の継続を実感できることは心強い。本協会におけるPC技術の向上と普及のための会員諸氏の活動により、PC技術に関する設計・施工・維持管理に関する指針の発刊、すなわち、PPC・外ケーブル・耐久性の指針により先進技術の普及の道筋がつけられたこと、建物や橋脚の耐震性能を高めるためのプレストレスの応用の研究や複合構造の研究など新たな可能性への取組みが続けられていること、プレストレストコンクリート技士の資格認定試験の制度が本年度で5回目を数え、難関を突破した技士の数は既に会員数を上回って技術者の広がりを示していることなどはいずれも、継続的活動が実を結んできた証である。個人正会員は3757名（1997年12月現在）を数え、4年前（1993年）と比較すると581名増となっている。

4年前に理事会において当協会の中に強力な組織をつくり、会員の力を結集してPC技術の進歩発展に寄与し、成果を世に出して行くことを決議したことを当時の会長であった池田尚治教授が1994年の年頭の巻頭言に述べておられるが、現在の成果はいずれも4年前の計画から生まれた結果である。

本協会のPC技術の研究成果は有用性ととも、目的設定・手法・成果の表現に合理性や透明性が基調にある点でも国際化の条件を備えている。PC関係者の国際交流は着実に身近になっている。国内はもとより海外のPC関係者の視線を最も集めている工事である木曾三川に架かる複合エクストラード橋の設計施工に関して、日本道路公団の技術者らとフランスのヴィルロジュー教授やチェコのストラスキー教授との間で活発な技術論争が交わされたことは、4月の名古屋シンポジウムでの記憶に新たであるし、2002年に大阪での開催が決定したfib（FIPとCEBの融合組織）の第1回コンGRESは、世界各地のPC関係者の活動の実態を相互に知る好機であり、個人的交流とともに、更にその先の時代にわが国のPC関係者が活躍すべき国際環境を豊かにするであろう。

今を基点とした過去4年の継続を振り返ると、これからの4年間の展望が開ける。過去から未来への8年間程度の期間にわたって継続することで達成されることの大きさも予感される。4年前の確かな見通しから始まった現在の流れは、昨今の不明と不況による困難の時代にも拘らず、技術の地歩を堅実に固めて前進できることを信じさせてくれる。時の勢いに良いものが流され、時代と共に移行行くものを惜しみ見送るのでなく、普遍性を見極めて継続して行きたい。

\* Jun YAMAZAKI：日本大学理工学部土木工学科教授・本協会常務理事